

インフルエンザの予防接種について

1. インフルエンザの予防接種の有効性

日本の6歳未満の小児で予防接種後に39度以上の発熱がありインフルエンザと思われる病気の発生を調べたデータがあります。予防接種を受けた1209人中219人(18%)、受けなかった1128人中269人(24%)に発熱が見られ予防接種は有効と考えられています。しかしこのデータで対象を1歳未満の小児に限ると予防接種の有効性ははっきりしませんでした。予防接種でインフルエンザ脳症の発生が減るかどうかの結論は出ていません。具体的には1999年の調査では202人の脳症患者で予防接種を受けていた人はいませんでした。2000年の調査では脳症患者91人中3人は予防接種を受けていました。

2. インフルエンザの予防接種が勧められる小児

米国の勧告では、慢性の心肺疾患のある人、糖尿病や腎機能不全や免疫不全症のある人、(川崎病で)アスピリンを服用している人、生後6か月から23か月の小児(この年齢層はインフルエンザにより入院する事が多いため)、また生後6か月以下の乳児は予防接種を受ける事が出来ないため、家族が予防接種を受けるよう勧告されています。

3. インフルエンザの予防接種の副反応について

局所反応として注射の部位が腫れて痛みを感じる事がありますが、通常2日以内で治ります。この反応は前の年にもインフルエンザの予防接種を受けている人に起こりやすいとされています。全身反応として発熱(日本のデータでは37.5度以上の発熱が3.8%)関節痛、全身倦怠感が注射後6~12時間で出現し1~2日間続く事があります。強い卵アレルギーのある人は注射直後に蕁麻疹や喘息が出たりショックになることがあります。稀にギランバレー症候群や脳炎が起こる事があると報告されています。ギランバレー症候群は通常はウイルス感染症の後に起こる神経の病気で、四肢の脱力、麻痺などが起こります。しかし米国の調査ではインフルエンザの予防接種とギランバレー症候群の関係はあまりないとされています。多く見積もって予防接種により100万人に1人の割合でギランバレー症候群が増える可能性があると考えられています。

4. インフルエンザの予防接種の実際

接種は原則的には約4週間隔で2回です。2回目の接種が12月中に終わる事が望ましいと思われます。強い卵アレルギーのある小児ではあらかじめ少量の予防接種液でテストをしてから予防接種をおこなう事もあります。予防接種後のショック等の重い副反応は接種後15分以内で出現します。迅速に治療することが必要ですので接種後しばらくは医院内でお子さんの様子を観察して頂きます。

5. その他

現行のインフルエンザの予防接種は鳥インフルエンザや新型インフルエンザには無効です。インフルエンザの予防接種は任意接種です。疑問な点は医師と話し合い、予防接種を受けるかどうかを決めて下さい。